

幼保小の架け橋プログラムの実施に向けての手引きの 参考資料（初版）（案）

「幼児期の終わりまでに育てほしい姿」を手掛かりに、

幼保小の先生と一緒に子供の姿から話し合おう

- 「幼保小の架け橋プログラムの実施に向けての手引き」（初版）においては、「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」を手掛かりとしながら、架け橋期のカリキュラムを策定できるよう工夫することとしている。
- 本参考資料（初版）は、幼保小の先生方が、「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」の共通理解のもとに、子供の姿を中心に据えて話し合うことができるよう作成したものである。
- ※取組の状況等を踏まえ、手引き（初版）とともに、本参考資料（初版）の更なる改善・充実を図る。

幼保小の架け橋プログラムの実施に向けての手引きの参考資料（初版）の目次

1. 「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」の捉え方の例

活動の中での具体的な幼児の姿について、「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」を手掛かりに捉える例を示している。

2. 事例を通して考えてみる

園と小学校の先生が協議をし互いに理解を深めていくうえでの手掛かりとなるような具体的な事例を示している。

※障害のある子供や外国人の子供等に関する事例や各教科等の事例も今後追加予定。

・記録を基に「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」について理解を深める

保育参観終了後に、担任の記録を基に園と小学校の先生が協議を行い、「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」への理解を深めた事例

・幼児と児童の交流

事前の話し合い、準備、当日の交流活動、「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」を活用した活動の振り返りを通して、園と小学校の先生が考え合いながら交流活動を実施した事例

・生活科を中心としたスタートカリキュラム

幼児期から児童期にかけて、自分との関わりを通して、総合的に学ぶ子供の発達の特性を踏まえ、生活科を中心とした合科的・関連的な指導の工夫を図り、スタートカリキュラムを編成した事例

・アサガオ栽培

児童がこれまでの経験を想起しながら安心して意欲的に活動できるようにすることで、1年生の学習をゼロからのスタートにせず、同じことの繰り返しではなく学びの質を高めていくように工夫した事例

・要録を作成し、小学校教育へつなげる

「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」を手掛かりに、小学校の先生にもわかりやすく要録を作成し、小学校教育へとつながるように工夫した事例

3. 「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」と先生の関わり・環境の構成や小学校へのつながり

「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」が、先生の関わりや環境の構成の改善・充実、幼児期に育まれた力が小学校教育にどのようにつながっていくのかのイメージの共有の手掛かりとして活用できるよう、整理して示している。

1. 「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」の捉え方の例

自らの興味や関心に応じて、思うがままに環境と関わる中で、様々な体験を積み重ねていく。その具体的な姿について「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」を手掛かりに捉える。

活動中での具体的な幼児の姿を通して、幼保小の先生方が話し合うことが大切である。ここでは、幼児が自分達で考えたお店屋さんごっこ（クレープ屋さんの場合）を例に、「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」を捉えてみる。

健康な心と体

明日、クレープ屋さんをやりたいと思って、お店に必要な小道具を考えてつくる

自立心

自分達で考えたお店作りが、自分達の力で実現できた達成感、友達が喜ぶ充実感を味わう

協同性

実現したいお店のイメージを友達と共有し、役割分担したり協力したりしながらごっこ遊びを展開する

道徳性・規範意識の芽生え

やりたいことが友達と異なる時には、折り合いをつけながらきまりをつくる

社会生活との関わり

楽しかった地域のお祭りの経験を友達と共有し、かっこよかったクレープ屋さんを再現してみたいと考える

興味や関心に応じて遊びに没頭する
10の姿が絡み合って現れてくる



楽しい

本物らしくしたい

一緒にやりたい

〔今後体験してほしい〕
共通の目的の実現に向けて協力したり、時には互いの思いがぶつかりあう中で、相手の立場になって考えたり、互いが納得できる代案を考えたりしてほしい。

〔過去の体験〕
絵をかいた時に、カラフルに色を塗って楽しんでいたので、また、カラフルにしたいと思ったのかな。

思考力の芽生え

ふさわしい材料を考えてクレープに見立て、より本物らしい見え方を試行錯誤する

自然への関わり・生命尊重

クレープを持って園庭や公園へピクニックに出かけ、花を愛でたり風の気持ちよさを感じたりする

数量や図形、標識や文字などへの関心・感覚

生活の中にある文字や数字を使ってみると、お店が本物らしくなり楽しくなることを知る

言葉による伝え合い

興味を持ったお店について友達と意見交換し、自分の思いが伝わる表現を工夫したりしながら話し合う

豊かな感性と表現

クレープ生地に具材を置くときに、カラフルできれいにみえるようにするなど、自分なりの表現を楽しむ

1. 「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」の捉え方の例

「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」として、どのような姿が見られるのか、実際の保育の場面を取り上げて語り合うことが大切である。

こうじゃない? ... え? こう?!



1学期から続くヒーローごっこ。園内バールを
したり、困ったことを解決したり、だんだん本格的
にヒーローになりきって遊ぶようになってくると、マシヤ
剣などのアイテムもこだわって作るようになってきました!
年長組が作るようなだまを2つ繋げた(突き通した)
かっこいい剣を作りたい!! 突き通すためには、
短いだまにどうやって穴を開ければいいんだろう...?
ハサミを挿して穴を開けて、ちぎちぎ切ったも
穴が大きすぎたり、切れすぎたり...
「あ〜もう、うまいかな〜」
の繰り返し...



「ここからいいんじゃない?」もっとうしろいいかも」
「え?ここ」とアイデアを出し合い、友達と一緒に試行錯誤
の連続。「いいわ!」「ほんとだ!」「おお〜!!」「できた!!」
ひらめいた! 気がついた! 見つけた!

こうして工夫を重ねながら作り上げた自慢のアイテム。
見てほしいこのポーズ!! この過程がわかるからこそ
この最高の表情と張り切り感

試行錯誤の時は沢山の悩んで考えたけれど、
だからこそ良い方法を自分たちで見つけた時の
喜び、嬉しさ、達成感は大いなのだと思います。
子どもの力を信じて見守る、そんな援助を
心掛けていきたいです!!



「指導と評価に生かす記録(令和3年10月)」3章2. (6)事例2の
学級だより

どんな姿が見られるか幼保小の先生たちで一緒
に考えてみましょう。

※子供の姿を語り合うプロセスを積み重ねることが大切です。

○ _____ 。

○ _____ 。

○ _____ 。

○ _____ 。

○ _____ 。

・
・
・

※様々な場面での保育や授業における子供の写真や動画
を用いて、幼保小の先生方で話し合うことが大切。

2. 事例を通して考えてみる ～記録を基に「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」について理解を深める～

「指導と評価に生かす記録(令和3年10月)」3章2. (4)事例4概要(一部修正)

園と小学校の先生が、保育参観や5歳児担任の記録を基に、幼児の育ちや園教育と小学校教育の学びのつながり、先生の関わりについて合同協議を行った。保育参観では、幼児が関わりながら土山で水路や温泉を作る遊びを取り上げ、幼児の姿から何に興味・関心をもって楽しんでいるのか、どのような力が育とうとしているのかなどの視点を設定した。協議では、具体的に見られた幼児の姿について、「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」を手掛かりとして、意見交換を行った。

<土山遊びのねらいと内容>

- ・ねらい：土や水の感触を味わうとともに、友達とイメージを共有し、自分なりに試したり考えたりしながら、友達と力を合わせて作る楽しさを味わう。
- ・内容：友達とイメージを共有しながら、力を合わせて大きな土山での水路作りをして遊ぶ。

<保育参観の視点>

- ・遊びの姿から、何に興味や関心をもって楽しんでいるのか
- ・遊びの中で、どのような力が育とうとしているのか（「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」を手掛かりに）
- ・育ちを支える園の先生のかかわり（環境の構成）について

<担任の記録>

幼児の姿	先生の読み取りと願い
<p>水路のある部分で、S児、R児、T児が土を深く掘り水をため、「温泉にしよう」と言っている。S児が「どれくらい深くなったかな」と言いながら裸足で入っていく。他の幼児も手を止め入っていき、「キャー！」と叫びながら、笑顔で手を取り合って喜んでいる。R児が「ここ、めっちゃ深い」と言うと、T児が「どこどこ？」と近づき深さを確かめる。その後、R児は水から出て、足のぬれている境目の部分を指差し、「ここ（ひざ）くらいまで！」と驚いていた。</p> <p>一方、M児が水の深いところ（温泉）と浅いところ（川）を行ったり来たりしている。M児が「こっちは冷たい」と言ったので先生も川に入り、「本当だ！」と驚いて伝えた。その声を聞いた周りの幼児たちが関心をもち始め、同じように行き来して確かめ、水温の差に驚いている。先生が「何でだろうね」とつぶやくが、幼児たちはあちこちを歩き回り、「ここがめっちゃあったかい」などと知らせ合っている。</p>	<p>水がたまった場所を掘り進め深い温泉にしたいと考えた。S児は見た目ではよく分からない水の深さを確かめたいと思い、R児とT児も続いた。裸足で浸かる水の気持ちよさと、自分たちが掘った深さを感じ、喜び合っている。</p> <p>水の中では感覚的に深さを感じていたが、足の濡れている境目を見て、改めてどれくらい深いかを実感している。</p> <p>M児が場所によって水温が違うことに気付き、繰り返しその違いを味わっていた。先生は、驚きを一緒に感じたいと思い、M児をまねてみた。そのやり取りに気付いた周りの幼児も水に入り、水温の差を感じ、驚き面白がっていた。</p> <p>先生は、なぜ水温が違うのか一緒に考えたいと思い「何でだろうね」とつぶやいたが、幼児たちはどこが温かいのか冷たいのか探ることを楽しんでいた。こうした体験を積み重ねていくことで、どうして水温が違うのか、なぜ温度が変わるのか、予想したり試したりして考えることを楽しみたい。</p>

2. 事例を通して考えてみる ～記録を基に「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」について理解を深める～

【保育参観後の協議】

「指導と評価に生かす記録(令和3年10月)」3章2. (4)事例4概要(一部修正)

視点①幼児にどのような力が育とうとしているかについて、「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」を手掛かりに考える園と小学校の先生からは、主に以下のような意見があった。

- ・友達と深い温泉を作ろうという共通の目的を見出し、工夫したり協力したりする姿
→「協同性」の「共通の目的の実現に向けて、考えたり、工夫したり、協力したり」する姿
- ・互いに気づいたことを伝えあい刺激し合う姿
→「言葉による伝え合い」の「経験したことや考えたことなどを言葉で伝えたり、相手の話を注意して聞いたり」する姿
- ・自分なりに水溜りの深さを確かめるための方法を考えてやってみる姿
→「思考力の芽生え」の「物の性質や仕組みなどを感じ取ったり、気付いたりし、考えたり、予想したり、工夫したり」する姿、「数量や図形、標識や文字などへの関心・感覚」の「遊びや生活の中で、自らの必要感に基づき、数量や図形」への「興味や関心、感覚をもつようになる」姿

視点②育ちつつある姿が、小学校の教育のどのような場面につながるかを考える

小学校の先生から、以下のような意見があった。

- ・「水溜りの深さ」を試行錯誤して確かめる体験は、水のかさなどについて調べる中で、実感を伴った理解につながる。
- ・学んだことを日常生活の中で活用し、主体的に問題を解決する態度にもつながる。

視点③園の先生や小学校の先生の関わりについて、大切にしていることを共有する

小学校の先生からは主に次のような意見があった。

- ・先生は、場所により水温が違うことを発見し、不思議に思ったり水の深さに着目する幼児の姿を見逃さず、一緒に楽しんで見せていた。意図的に教えなかったと知り、驚いた。
- ・園では繰り返し取り組みながら学んでいける。その体験が小学校以降、物事に関心をもち、その理解を確かなものにしていくことにつながると感じた。

園の先生からは次のような意見があった。

- ・幼児はいろいろな場所の温度を確かめたり、温度差を肌で感じることを楽しんでいる段階と思い、調べて回り温度差を味わうことが大事と判断した。遊びを繰り返す中で、理由を予想したり、仮定して試したりしていきたい。
- ・幼児教育では、すごい、おもしろい、なぜだろうといった気付きをどう深めるか、その過程を大事にしている。

この事例を通して、例えば、次のようなことが分かった。

- ・保育参観は参観と協議の視点を示して行うこと、幼児の具体的な姿や先生の関わり在意図を示した記録を基に協議を行うことで、「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」を踏まえた幼児理解ができる。また、「園の先生が自分たちの保育に対する評価を行う場とするだけでなく、小学校の先生の幼児教育への理解を深める場とする」、「園の先生が小学校教育について学び、幼児の学びの見通しをもつ」などといったよさが見えてきた。このように、互恵性のある合同協議の場となるよう、協議の事前準備やその方法を工夫して進めることが大切。

2. 事例を通して考えてみる ～幼児と児童の交流～

「幼児の思いをつなぐ指導計画の作成と保育の展開(令和3年2月)」3章2. 事例5概要

5歳児と小学校1年生の交流（七夕製作）。交流活動では、幼児児童それぞれにねらいを設定するとともに、共通のねらいを設定。交流活動は2学級に分かれて別日程で実施し、事前の話し合い→準備→交流活動→振り返りを行った。最初の交流活動では、児童が一人一人の幼児に寄り添い丁寧に教えながら七夕飾りを製作している様子が見られ、幼児も落ち着いて活動できていた。

最初の交流活動を園と小学校の先生と一緒に振り返ってみると

- ・楽しく活動をしており、ねらいもおおむね達成できていた
- ・小学校の先生の指示がとてもの確でスムーズな交流活動ができた

しかし、次第に「自分でできることをやってもらっている幼児にとって交流の中での学びは何か」といった意見もでてきたので、幼児・児童それぞれにおける学びについて意見交換を行った。その際、「幼児期の終わりまでに育てほしい姿」を手掛かりとして活用した。活動を通して、主として次のような姿が見られたとの意見がでた。

- ・いろいろな人と親しみをもって関わる姿や、どのように関わったらよいかということを考える姿（社会生活との関わり）
- ・自己紹介をする、相手に作り方を教える、願い事を伝える、話をしっかり聞くなどの姿（言葉による伝え合い）
- ・4つの種類の製作を時間内で作るという課題に対して、見通しをもつ力（健康な心と体）

話し合ううちに、園の先生からは次のような意見があった。

- ・指示により安心して活動できるが、幼児が考える余地があれば、違う立場の人との関わり方を考える姿（社会生活との関わり）、時間の使い方やどの製作をするか等見通しをもって行動する姿（健康な心と体）がみられるのではないか
- ・園では幼児同士が助け合ったりしているが、交流会では全員がお世話される側の印象。幼児が能動的に行動する姿や児童と一緒に目的に向かって取り組む姿があまり見られなかった(自立心、協同性)
- ・願い事の短冊は書けないところのみ手伝ってもらう方がいいのではないか（数量や図形、標識や文字などへの関心・感覚）

小学校の先生からは次のような意見があった。

- ・製作が得意であったり、リーダーシップをとれたりする幼児がいることがわかった
- ・同学年の中ではなかなか力を出せないが、今日は自信をもって活動できていた(自立心)
- ・年下の子に何かしてあげたいという気持ちからがんばろうとする姿も見られた(社会生活との関わり)

2. 事例を通して考えてみる ～幼児と児童の交流～

「幼児の思いをつなぐ指導計画の作成と保育の展開(令和3年2月)」3章2. 事例5概要

さらに、先生の子供への関わり方についても話し合いが及んだ。

小学校の先生からは次のような意見があった。

- ・園の先生は、認めたり、共感したりと子供たちにその場で直接的な関わりをすることが多いように思った。児童には自分なりに考えさせ、結果を自分で受け止めさせたい

園の先生からは次のような意見があった。

- ・園では、認めて伸ばす、共感するということが大切にしている
- ・幼児は遊んでいるそのときに楽しさや満足感を味わえないと次回へと気持ちが続かないので早めに援助しやすいかも

そして、子供たちの発達を踏まえた対応の違い等に戸惑ったとの意見があった。次回の交流活動では互いの指導をよく見合い、互いの教育についてもっと理解し合う必要があること、子供たち同士の交流を大事にするため、子供たちがつくり上げようとする世界をもっと大切を確認し合った。また、先生は1年生に「～してください」などの指示を控え、4種類全ての製作を目指すのではなく、何をどれだけ作るかも子供たちに考えさせた。

次の交流活動を園と小学校の先生と一緒に振り返る中で、次のような意見があった。

- ・前回同様、児童や幼児が交流活動を通していろいろな人と親しみをもって関わる姿やどのように関わったらよいかということを考える姿（社会生活との関わり）、相手に作り方を教える、話をしっかり聞くなどの姿（言葉による伝え合い）、見通しをもって活動する姿（健康な心と体）などが見られた
- ・子供たち自身でグループ内の関係づくりができるようにし、活動も各グループに任せることにした結果、「『皆で』とか『私たち』という言葉が聞かれ、一つのめあてにむかって、児童も幼児も一緒になって取り組む姿が見られた(協同性)。そのことによって、達成感も見られた(自立心)
- ・輪飾りの数を数えたり、長さを測ったりする活動にも広がったり、幼児にとっては文字を書く機会もできた(数量や図形、標識や文字などへの関心・感覚)

この事例を通して、例えば、次のようなことが分かった。

- ・交流活動の振り返りの積み重ねが子供たちに対してより意味のある活動になるかどうかのポイント
- ・幼児と児童の交流は、双方の子供たちの育ちの上で有意義であるだけでなく、双方の先生にとっても同じ場面の子供の育ちの姿を話題にしていくことで、それぞれの学校種の指導方法や教育観などを理解する良い機会となっている

2. 事例を通して考えてみる ～ 生活科を中心としたスタートカリキュラム～

「幼児の思いをつなぐ指導計画の作成と保育の展開(令和3年2月)」3章2. 事例6概要(一部修正)

A小学校では、幼児期の教育の学びを踏まえ、より深い学びを実現していくための指導計画を作成しようとし、入学当初、学校や子供の実態に応じて指導の工夫や指導計画の作成を行うために、生活科を中心としたスタートカリキュラム「がっこう だいすき」を構想した。

幼児期から児童期にかけて自分との関わりを通して、総合的に学ぶ子供の発達の特徴を踏まえ、次の2つの視点からスタートカリキュラムを構想した。

- ・生活科「がっこうたんけん」を中心に他教科等のねらいを考えて、合科的・関連的な指導の工夫をする。
- ・直接体験を通して、生活上必要な習慣や技能等を身に付けられるようにする。

園との円滑な接続のため、合同保育参観を行った後、「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」を踏まえ、子供の成長の姿や先生の働き掛けの意図について共有を図った。園の先生からは園の生活について、登園したら主体的に自分のしたい活動に取り組み、道具や材料を自由に使えるように用意していること、先生がいなくても幼児同士で教え合いながら作ったり遊んだりする育ちの姿があることが紹介された。

A小学校では、園との意見交換を踏まえて入学してくる子供の様子を想定し、スタートカリキュラムのねらいを設定した。また、編成の基本姿勢を確認して週案を作成した。

<スタートカリキュラムのねらい>

- ・幼児期の生活に近い活動や環境の工夫、人と関わる活動を位置付け、安心感をもてるようにすること
- ・安心して自分の力を発揮し、成長への意欲を高めること
- ・自分で考え、判断し行動することを繰り返し、主体的な学習者として育っていくこと
- ・全ての教職員が子供たちと関わりをもつために、学校全体の取組として考えること

<スタートカリキュラム編成の基本姿勢>

- ①一人一人の子供の成長の姿から編成する
- ②子供の発達を踏まえ、時間割や学習活動を工夫する
- ③安心して自ら学びを広げる学習環境を整える
- ④生活科を中心に合科的・関連的な指導の充実を図る

2. 事例を通して考えてみる ～ 生活科を中心としたスタートカリキュラム～

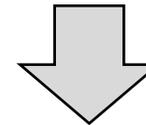
「幼児の思いをつなぐ指導計画の作成と保育の展開(令和3年2月)」3章2. 事例6概要(一部修正)

第2週の週案「はじめまして学校～自分でできるようになろう～」

	16日(月)	17日(火)	18日(水)	19日(木)	20日(金)
8:30 朝の活動	登校したら荷物の整理・トイレ、席についてお絵かき・読書 幼稚園で親しんだ絵本や手遊び歌 教室の後ろに低いテーブルを置き、自由に活動				
8:50 1時間目	【国・生】 はじめて書く自分	【音・生】 歌を歌ってなかよ	【生】 学校たんけん②	【生】 学校たんけん③	【音】 歌でなかよし
9:35 2時間目	分の名前 どうぞよろしく じこしようかい	くなろう モジュールにわかる	もう一度たんけん したいな	もう一度行って見 たい場所はどこ かな	校歌
9:40 10:25	【体・生】 探検に行く順に 並ぼう	【体・算】 体操服に着替え よう	【生・算】 校庭たんけん 遊具の使い方	【図】 いろいろなかたち を作ってみよう	
10:45 11:30	学校にはどんな ところがあるのか な	【生・図】 みなさん よろしく	10までの数 《合科的な指導》 	【体】 ならびっこ 遊具で遊ぼう	【算】 数と数字
11:35 12:20			【算】 数えて遊ぼう	【学】 皆で給食の準備 をしよう	【国】 えんぴつを持っ て書いてみよう
給食	楽しい給食				
清掃	自分の場所をきれいにしよう				
14:05 5時間目			【音】 手と手であいさつ	【算】 なかまをつくろう	参観授業
14:50	よろしくね 名刺 交換		ちょうちょう		【国】 えんぴつを持っ て書いてみよう

【週案を作成する際に意識して取り入れたこと】

- 朝の時間「なかよしタイム」で園で親しんだ手遊び歌、読み聞かせ
- 好きな材料で自由に絵を描いたり、製作ができる低いテーブル
- 複数の教科等を組み合わせて展開する合科的・関連的な指導
- 新しい友達と交流ができる学習活動（グループ活動、名刺交換）
- ゆったりとした時間の中で学習活動が進められる2時間続きの学習活動
- 10～15分程度の短い時間を弾力的に活用した時間割（モジュール）



💡 具体の実践と記録を見てみましょう

2. 事例を通して考えてみる ～ 生活科を中心としたスタートカリキュラム～

「幼児の思いをつなぐ指導計画の作成と保育の展開(令和3年2月)」3章2. 事例6概要(一部修正)

「もっと、見たい、知りたい、調べたい」～幼児期に育まれた好奇心、探究心を生かして～

園では、自然散策をしながら見付けた木の実を観察したり、図鑑で調べたりする活動を体験しており、関心のあることについてより詳しく知りたいと考え遊ぶ幼児の姿が見られていた。また、きれいな虹や雲の変化を発見すると、友達や先生に伝えたり、絵をかいたりして、好奇心や探究心をもって考えたことをその幼児なりの言葉や絵で表現する姿が見られていた。小学校では、幼児期に育まれた好奇心や探究心を生かし、入学当初の児童が感じている不思議や驚きを大切に「がっこうたんけん」をスタートした。

【スタートカリキュラム「がっこうたんけん」の実践における記録と考察】

●第3週（4月27日） ー学校のいろんなところを探検したよー

学校探検により、「図書室で本の修理をしていた」「給食のいいにおいがした」と気付いたことを発表した。先生は児童の発言を黒板に書きながら、もっと知りたい、調べてみたいという好奇心、探究心を引き出していった。児童の思いを付箋に書いて学校探検の地図に貼り付け、児童の思いや願いの解決に向けた2回目の探検を行うことにした。

●第5週（5月8日） ーもっと探検して分かったことを発表しようー

前回の探検で本の修理をしていた図書室の先生に「図書室でどんな仕事をしているのですか？」とインタビューした児童の発言から、分からないことは人に尋ねて教えてもらうといいことに気付いた。校長室を調べに行った児童は、校長室のメダルは何のメダルなのかという疑問をもち、校長先生にインタビューすることになった。校長先生は「このメダルは小学校のお兄さん、お姉さんたちがもらったんだよ」と上級生の活躍の話をしてくれ、上級生の存在にも気付き、親しみとともに憧れをもったようだ。不思議に感じたことを解決した児童たち。人とつながっていくことで、「わたしも頑張りたい」と学校生活への夢や希望をもち、意欲をもって生活するようになる姿が期待できる。

2. 事例を通して考えてみる ～生活科を中心としたスタートカリキュラム～

「幼児の思いをつなぐ指導計画の作成と保育の展開(令和3年2月)」3章2. 事例6概要(一部修正)

●第10週以降(6月12日) —自分たちの安全を守ってくれる人たち—

ある児童は交通指導員のSさんについて、「いつも挨拶してくれる」「横断歩道で渡ってもいいよと教えてくれるよ」と、Sさんから声を掛けられて嬉しかった体験を発表した。その挨拶や言葉に込められている思いに触れ、通学路で安全を守ってくれていることに気付き、お礼をしようと考えた。先生がどうしたらお礼ができるか問い掛けると、児童から「ありがとうと言いに行こう」「お手紙を書いたらいい」と具体的な活動を伝え合った。そして、Sさんを学校に招き、お礼の手紙と折り紙で作ったプレゼントを渡した。Sさんは交通指導員の仕事や役割について話し、「皆が元気に挨拶し、安全に学校に通ってくることが嬉しい」と語ってくれた。児童にとって交通指導員は直接関わりがあり、親しみをもつ存在。交通指導員の仕事や役割、自分との関わりに気付くだけでなく、安全な学校生活のためにいてくれることの意味を見いだした。自分が体験したことや調べたことを他者と伝え合い交流する中で、一人一人の気付きを共有し、学級全体で高めていくことができた。

この事例を通して、次のようなことが分かった。

- 児童は小学校に入学し、具体的な活動や体験を通して気付いたことを基に考えることで、新たな思いや願い、疑問などが生まれる。それを一つ一つ取り組んだり解決したりすることで、施設の様子や学校生活を支えている人々や友達などに気付く。そして、自分たちは様々な人や場所と関わり、支えられていることを実感することで安心感をもつ。
- 園でも行っている、気付いたことを伝え自分なりに表現し友達と振り返る場の設定により、曖昧だった気付きが確かなものになっていった。園での経験を踏まえ、体験と表現を繰り返すことで、気付きの質を高め、学びを深めていると言える。
- 今後も園での幼児の姿、学校での児童の姿から、それぞれの学びを園と学校の先生が共有し、スタートカリキュラムを編成・実践しながら、1年生の様子を授業参観等で把握したり、先生同士が意見交換したりすることで、スタートカリキュラムの評価・改善につなげていくことが期待される。

2. 事例を通して考えてみる ～ 生活科 アサガオ栽培～

「幼児の思いをつなぐ指導計画の作成と保育の展開(令和3年2月)」3章2. 事例7概要(一部修正)

児童たちがこれまでの経験を想起しながら安心して意欲的に活動できるようにし、1年生の学習をゼロからのスタートとせず、アサガオやそれを使った遊びについて、同じことの繰り返しではなく学びの質を高めていくように工夫した。

児童は、園や家庭において色とりどりのアサガオの花を見たり育てたりする経験を通して、アサガオは種から育つこと、育つとつるが出て巻き付きながら伸びることなどに気付いたり、友達や先生に伝えたりしている。また、植物が育つためには世話が必要なことも漠然と理解し、友達と一緒に水やりなどをした経験をもつ児童もいる。アサガオの成長に関心をもち、生命の尊さに気付き、いたわったり大切にしたりしてきている。

【生活科 アサガオ栽培における指導のポイント】

例えば、

- ・単元を構想するに当たり、通っていた園等や家庭から、植物の栽培やそれを生かした遊び、製作などに関する情報を収集し、**幼児期の経験や学びを栽培活動につなげられるよう工夫した。**(★例1)
- ・自分のアサガオを一人一鉢で栽培することを基本とした。**学習の環境は「環境を通して行う教育」を基本とする幼児教育を参考とし**(★例2)、例えば、アサガオの鉢は、日常的に関われるよう玄関や教室の前に置いたり、遊びや製作の際には、材料や道具の種類や量、配置に配慮した。また、入学間もない時期であることから、**特に一人一人の取組の違いに十分配慮した**(★例3)。
- ・児童の実態を把握した上で単元を構想し、児童の興味や関心が高まるような導入にしたいと考え、学習計画を児童たちと一緒に立てることで、**単元全体の見通しをもって学習を進められるようにした**(★例4)。
- ・「幼児期の終わりまでに育ててほしい姿」を参考にしながら、児童が**学習対象と主体的に関わりながら活動できるよう工夫した**(★例5)。
- ・**伝え合い交流する場を意図的・計画的に設定することで、児童の気付きの質を高めることにもつなげていこうと考えた。**(★例6)
- ・表現しやすいように観察カードを工夫したり、生活科の時間以外にも児童同士で情報交換できる機会をつくったりした。観察の際には、見るだけでなく、嗅いだり触ったりするなど、**諸感覚を働かせることを促し、比べたり、見付けたりなど、多様な学習活動となるようにした**(★例7)。
- ・観察で気付いた事実にとどまらず、**自分の気持ちと結び付けて表現できることも大切。**(★例8)
- ・振り返り表現する活動を通して、アサガオの世話をして成長を見守った自分自身の成長や自信につなげたいと考えた。

2. 事例を通して考えてみる ～ 生活科 アサガオ栽培～

「幼児の思いをつなぐ指導計画の作成と保育の展開(令和3年2月)」3章2. 事例7概要(一部修正)

【単元の目標】

アサガオを育てる活動を通して、その変化や成長の様子に関心をもって働き掛けることができ、アサガオが成長していることに気付くとともに、親しみをもち大切にしようとする。

①「アサガオの種をまこう」(本時1/18)

◆本時の目標：アサガオについてこれまでの経験や知っていることを伝え合うことを通して、種を観察したり自分がまく種を選んだりして、アサガオを育てることへの意欲や、経験を基にきれいな花を咲かせることへの期待をもつことができるようにする。

主な活動	指導上の留意点
<p>○アサガオの写真を見て、これまでの経験を想起する。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・「園にたくさん咲いていた」 ・「先生と一緒に水やりしたよ」 ・「色水つくって遊んだよ」 ・「最後にいっぱい種ができた」 	<p>○興味や関心には個人差があるので、多くの児童が意欲的に取り組めるよう、これまでの経験を問い掛けるだけでなく、学習環境も工夫する。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・アサガオの写真をしっかり見ることができるよう、児童を教室の前に集め、目の高さで提示する。 ・つぶやきも拾い、できるだけ多くの意見を取り上げる。 ・個々の経験は違っても、それぞれがアサガオについて想起できている姿を認める。
<p>○アサガオを育てる中で、やってみたいことを伝え合う。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・「きれいな花をたくさん咲かせたい」 ・「水を毎日やるのが大切だよ」 ・「花が咲いたら、色水遊びをしたいな」 	<p>○園などでは、植物を栽培する際にどうしていたか問い掛け、経験を取り上げていくことで「これまでの経験が小学校でも使える」という自信をもてるようにする。(★例1)</p> <p>○児童の意見から、「めあて」や「学習計画」を設定し、見通しをもてるようにすることで、主体的な学びの実現につなげる。(★例5)</p>
<p>○本時を振り返り、気付いたことや楽しみなことを伝え合う。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・「大きくなるようにたくさん水をやるぞ」 ・「何色の花が咲くのか楽しみ」 	<p>○栽培への意欲に結び付けるようにする。</p>

2. 事例を通して考えてみる ～ 生活科 アサガオ栽培～

「幼児の思いをつなぐ指導計画の作成と保育の展開(令和3年2月)」3章2. 事例7概要(一部修正)

②「アサガオの芽を観察しよう」(本時5/18)

◆本時の目標：芽を出したアサガオの様子を観察してカード等に記録し、それを基に交流することを通して、各自の発見したことや楽しみなことを友達に伝えることができるようにする。

主な活動	指導上の留意点
<ul style="list-style-type: none"> ○アサガオの芽が出た様子を観察する。 <ul style="list-style-type: none"> ・「同じ葉っぱが2つある」 ・「〇〇さんのは、大きい葉っぱがあるね。形も違うみたい」 	<ul style="list-style-type: none"> ○自分のアサガオだけでなく、友達のアサガオも見て比べよう促す。(★例7)
<ul style="list-style-type: none"> ○観察カード等を基に、自分のアサガオについて紹介する。 <ul style="list-style-type: none"> ・「種が葉の上ののっていて重そう。早くとれるといいな」 ・「〇〇くんは、葉っぱがたくさんあってすごいな」 	<ul style="list-style-type: none"> ○自分のアサガオをしっかりと発表できていることを認める。 ○友達の発表を聞くときには、自分と比べて聞くようにすることで、気付きの質を高めるようにする。(★例6)
<ul style="list-style-type: none"> ○本時を振り返って次時につなげる。 <ul style="list-style-type: none"> ・「〇〇さんみたいに大きくなるように、毎日水をやろう」 	<ul style="list-style-type: none"> ○アサガオの成長を楽しみにし、世話をしていこうという気持ちをもてるようにする。

③「アサガオの世話の仕方を考えよう」(本時6/18)

◆本時の目標：アサガオの支柱を立てることを通して、大きくなったアサガオの世話の仕方を考え、それに合った世話ができるようになるとともに、大切にアサガオの世話をすることができるようにする。

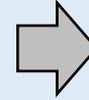
主な活動	指導上の留意点
<ul style="list-style-type: none"> ○大きくなったアサガオについて、感じていることを伝える。 <ul style="list-style-type: none"> ・「くねくね伸びて、〇〇さんのとくっついちゃった」 	<ul style="list-style-type: none"> ○成長の早いアサガオのつるが伸び始めた頃がよい。伸びたつるが絡まり困っていることを引き出せるようにする。
<ul style="list-style-type: none"> ○本時を振り返って、次時につなげる。 <ul style="list-style-type: none"> ・「明日はつるがどうなっているかな」 ・「これで安心、どんどん大きくなってね」 	<ul style="list-style-type: none"> ○アサガオの成長をますます楽しみに感じながら、世話を続けていけるようにする。(★例8)

2. 事例を通して考えてみる ～ 生活科 アサガオ栽培～

「幼児の思いをつなぐ指導計画の作成と保育の展開(令和3年2月)」3章2. 事例7概要(一部修正)

新たな気づきとなり、気づきの質が高まっていく(気づきの変容)

- ◎無自覚だった気づき
- ◎個々の気づき



- ◎自覚化された気づき
- ◎他の気づきと関連付けられた気づき

④「アサガオのひみつを見付けよう」(本時8/18)

◆本時の目標:花が咲いたアサガオを観察することを通して、成長の様子を見付けたり比べたりたえたりして、植物の成長のおもしろさや不思議さに気付くとともに、これからの成長を楽しみにして育てることができるようにする。

主な活動	指導上の留意点
<ul style="list-style-type: none"> ○花が咲いたアサガオを見て、気付いたことを出し合う。 <ul style="list-style-type: none"> ・「きれいな花がいっぱい咲いている」 ・「水やりを頑張ったから、葉っぱも元気だよ」 	<ul style="list-style-type: none"> ○自由に気付いたことを言い合える雰囲気をつくり、花だけでなく他のところについての意見も積極的に取り上げていく。 ○これまでに各自が世話をしてきた頑張りを認めるようにする。
<ul style="list-style-type: none"> ○自分のアサガオを観察し、見付けたことをカードに記録する。 <ul style="list-style-type: none"> ・「本当だ!虫眼鏡を花から離したら大きくなった」 ・「つぼみって、何だかねじれているみたい」 ・「〇〇くんの花は、私と同じピンクだけど色が濃いね」 ・「今日初めて花が咲いたんだ」、「嬉しいな」 	<ul style="list-style-type: none"> ○細部まで観察するよう虫眼鏡を準備しておく(★例4)。使用の際には扱い方にも留意する。 ○見付けることの観点として、次のことが考えられる。 <ul style="list-style-type: none"> ・花(含つぼみ)、葉、つる ・色、数、大きさ、形・見る、嗅ぐ、触る ○これまでの自分のカードと比べてみることも観点の一つとして提示してもよい。
<ul style="list-style-type: none"> ○見付けたことについて、発表し合う。 <ul style="list-style-type: none"> ・「葉っぱは、全部で〇枚、大きいのは手より大きい」 ・「私のつるも友達のつるも同じ向きに巻き付いていた」 ・「葉っぱに毛がはえていて、ざらざらする。ひげみたい」 	<ul style="list-style-type: none"> ○具体的な数や比較を用いて伝わりやすい表現を取り上げる。 ○全体として確認したいことは、一人一人が観察できる時間をもつようにする。 ○児童の気づきを黒板に書きながらまとめ、共有を図る。
<ul style="list-style-type: none"> ○これからもアサガオの成長を楽しみにし育てようとしている。 <ul style="list-style-type: none"> ・「全部でいくつ咲くのかな」、「数えてみよう」 	<ul style="list-style-type: none"> ○各家庭でもアサガオの成長を楽しみにしていけるように観察カードを工夫する。

2. 事例を通して考えてみる ～ 生活科 アサガオ栽培～

「幼児の思いをつなぐ指導計画の作成と保育の展開(令和3年2月)」3章2. 事例7概要(一部修正)

⑤「アサガオの花や葉っぱで遊ぼう」(本時11/18)

◆本時の目標：アサガオの花や葉っぱを使ってできることを出し合い、それらの遊びを楽しむことを通して、アサガオへの愛着をもち、これからも大切にしようとする気持ちをもつことができるようにする。

主な活動	指導上の留意点
○たくさんの花や葉を使い、どんな遊びができるか話し合う。 ・押し花、たたき染め、色水づくり	○これまでの経験を基に、できる遊びや、それに必要な材料や用具を考えられるようにする。(★例3)
○それぞれが自分のアサガオでしたい遊びをする。 〈押し花コーナー〉 ・「園のときは花で作ったから、今度は葉っぱも一緒に入れたいな」、「どれくらいで押し花になるかな」	○それぞれの遊びができるような環境を設定する。 ・押し花コーナー・たたき染めコーナー・色水コーナー ○材料や用具の種類や量、配置に配慮する。(★例2)

⑥「すてきな記念品を作ろう」(本時14/18)

◆本時の目標：記念品を作るのに必要な準備を話し合うことを通して、種を取った後のアサガオのツルを生かたリース作りを思い浮かべながら、アサガオを育てた気持ちも大切にしようとするようにする。

主な活動	指導上の留意点
○種を取った後のアサガオをどうするか話し合う。 ・「園のとき、サツマイモのリースを作ったよ」 ・「アサガオでもできるかもしれない」、「つくりたいな」	○茎(つる)を使って作った経験を想起できるようにする。 ○児童のアサガオを大切にしたいという気持ちは受け止め、実現できることという観点で作る記念品を決めていく。
○必要なものを話し合う。 ・「つるを丸くしているよ」、「飾りが違うと全然違うね」 ・ひも、針金、松ぼっくり、ビーズ、木工用接着剤等	○見本を提示する。作り方は児童が考えられるようにする。 児童の意見から作り方を整理し、材料の準備につなげ、リース作りの見通しを持てるようにする。

この事例を通して、次のようなことが分かった。

○生活科では、対象に直接働き掛けたり、気付いたことを表現したりする具体的な活動や体験を繰り返し、対象との関わりを深めながら気付きの質を高めていくことを目指している。「気付きの質が高まる」とは、無自覚だった気付きが自覚化されること、個々の気付きの共有からそれぞれが関連付けられ新たな気付きになること、対象のみならず自分自身への気付きになることなど、気付きが変容していくことである。

○小学校においても、先生は児童の気付きに共感したり、疑問に児童が答えを探せるよう環境を整えたりすることが大切。

○児童たちが「園でもやったことがある」と安心したり関心をもったりして学習に取り組むことや、対象に繰り返し関わり気付きの質を高めるためには、幼児期に豊かな体験を積み重ねることが大切。例えば、自然との触れ合いで、幼児期には、まず幼児がゆったりと自然に向き合える時間を確保し、十分な経験を保障することが必要不可欠。また、先生自らが自然の変化に気付き、幼児と共に感動したり、命を大切にしたりする姿勢をもつことが重要。

2. 事例を通して考えてみる ～要録を作成し、小学校教育へつなげる～

「指導と評価に生かす記録（令和3年10月）」3章 事例3概要（一部修正）

日々の記録を基に、幼稚園教育要領等に定めるねらいから幼児の成長を捉え、「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」を手掛かりに、小学校の先生にもわかりやすく要録を作成し、小学校教育へとつなげるようにした。

5歳児のA児の担任は、日々の記録を基に、以下のように要録の〈指導上参考となる事項〉欄に記入する内容をまとめた。

一学期、年中時より仲の良い友達と一緒に園庭で鬼遊びやドッジボールを好んで行う。次第に体力がつき、運動的な遊びに自信をもつようになった。しかし、自分でやりたいことよりも仲の良い友達の意見に合わせて動くことも多かった。そこで、本児がやりたいことを伝えるきっかけをつくったり、本児の考えを取り上げ、認めたりするようにした。少しずつ、自分の意見を友達に受け止めてもらえる機会が増え、三学期には、自分からやりたいことを伝えたり、友達とやりたい遊びが違うときには、別の友達も誘って遊んだりする姿も見られるようになった。

まとめた内容が小学校の先生にわかりやすく伝えるものとなっているか、以下の視点から検討した。

視点①：「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」や育まれている資質・能力を意識して捉えられているか

日々の記録からはA児が気持ちを切り替えて友達と遊ぶ姿を多く読み取れるが、担任がまとめた要録にはそれが表れていないのではないかと意見がでた。そこで、「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」から記述を見直し、A児の一年で育っている姿を再認識した。

視点②：指導の過程を記しているか

日々の記録に書かれている「自分が考えたことを一人で自信をもって言うことができなかつた姿」も加えた方が、幼児の変容がよく伝わるだろうとの協議がなされた。

視点③：小学校での指導に生かすための育ちつつある姿を記しているか

小学校で引き続きどのようなことに配慮して指導すべきかが伝わりにくいとの意見がでた。そこで、自分の気持ちや考えに自信をもった表現をしようとしている姿について丁寧に記すことにした。

2. 事例を通して考えてみる ～要録を作成し、小学校教育へつなげる～

「指導と評価に生かす記録（令和3年10月）」3章 事例3概要（一部修正）

協議を踏まえ、下線部分を追記し、より指導の過程や幼児の育ちが伝わるものとなるようにまとめ直した。

一学期、年中時より仲の良い友達と一緒に園庭で鬼遊びやドッジボールを好んで行う。進級当初は、嫌なことがあると気持ちを切り替えるのに時間がかかることもあったが、繰り返し運動的な遊びをすることで、友達との関わりを楽しみ充実感を味わうようになってきた。また、ルールのある遊びの中で、友達と作戦を考えたり役割分担をしたりしながら楽しんできたことで、自信をもって行動するようになった。（視点①）

自分が考えたことを一人で自信をもって言うことができない姿（視点②）や、自分でやりたいことよりも中の良い友達の意見に合わせて動くことも多かった。そこで、本児がやりたいことを伝えるきっかけをつくったり、本児の考えを取り上げ、認めたりするようにした。少しずつ、自分の意見を友達に受け止めてもらえる機会が増え、三学期には、自分の考えたことを自分なりの言葉で表現したり（視点③）、友達とやりたい遊びが違うときには、別の友達も誘って遊んだりする姿も見られ、表現することへの自信が生まれてきている。（視点③）

この事例を通して、次のことがわかった。

- 小学校で引き続き伸ばしてほしいことや今後の指導に生かしてほしいことを分かりやすく記入することが大切である。
- 「幼児期の終わりまでに育ててほしい姿」を手掛かりにして捉えることで、小学校の先生にも伝わりやすいものとなるとともに、先生の視点の偏りを確認でき、総合的に幼児の成長を伝えられることにもつながる。

また、小学校の先生からは以下の感想があった。

- 「幼児期の終わりまでに育てて育ててほしい姿」が現れるためには、先生方の言葉掛けや環境の構成など指導の積み重ねが大切である。
- 幼児ができることやもっている力を理解した上で、1年生の指導を行うことが大切である。

3. 「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」と先生の関わり、環境の構成や小学校へのつながり

「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」は、幼児一人一人の発達していく姿を捉え、生活や学びの質を高めていくよう、先生方の関わりや環境の構成を改善・充実していくための視点として活用。

また、幼児期に生まれた力が小学校教育にどのようにつながっていくのか、関係者がイメージを共有できる手掛かりとしても活用（「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」は、各教科等のみでなく、小学校以降の学習や生活の基盤につながる姿であることにも留意）。

※下記の一覧表は、幼稚園教育要領等の解説を参考に整理したもの。

幼児期の終わりまでに育ってほしい姿		幼児教育施設			小学校へのつながり
		～5歳児前半の姿	5歳児後半の姿	先生の関わり、環境の構成	
健康な心と体	園生活の中で、充実感をもって自分のやりたいことに向かって心と体を十分に働かせ、見通しをもって行動し、自ら健康で安全な生活をつくり出すようになる。	安定感をもって環境に関わり、自己を十分に発揮して遊びや生活を楽しむ中で、体を動かす気持ちよさを感じたり、生活に必要な習慣や態度を身に付けたりしていく。	充実感をもって自分のやりたいことに向かって、繰り返し挑戦したり諸感覚を働かせたりして、体を思い切り使って活動したりするなど、心と体を十分に働かせる。そして、遊びの目的に沿って、時間を上手く使い、適切な場所を選んで、遊びを進めたり、衣服の着脱、食事、排泄などをいつどのように行うのかがわかったりするようになるなど、見通しをもって行動し自ら健康で安全な生活を創り出すようになる。	<ul style="list-style-type: none"> ・幼児が自ら体を動かし多様な動きを楽しめるような場や遊具を用意する。 ・園生活が幼児の意識の中でつながり、大まかな予測が立てられるように工夫する（例えば、十分に遊んだ満足感が次の活動への期待感につながり、片付けの必要性を無理なく受け止められる）。 ・健康で安全な生活のために必要なことを、学級で話題にして一緒に考えてやってみたり自分たちでできたことを十分に認めたりするなど、自分たちで生活をつくりだしている実感をもてるようにする。 ・交通安全を含む安全に関する指導について、日常的な指導を積み重ねることによって、自ら行動できるようにしていく。 	<ul style="list-style-type: none"> ・時間割を含めた生活の流れがわかるようになる、次の活動を考えて準備する。 ・安全に気を付けて登下校。 ・小学校での運動遊びや、休み時間に他の小学生と楽しく過ごす。
自立心	身近な環境に主体的に関わり様々な活動を楽しむ中で、しなければならないことを自覚し、自分の力で行うために考えたり、工夫したりしながら、諦めずにやり遂げることで達成感を味わい、自信をもって行動するようになる。	身近な環境に主体的に関わり様々な活動を楽しむ中で、信頼する先生に支えられながら、物事を最後まで行う体験を重ね、自分の力でやろうとする気持ちをもったり、やり遂げた満足感を味わったりするようになる。	飼育動物の当番活動から自分の役割の大切さを感じるなど、園生活を通して、自分のしなければならないことを自覚し、自ら行動するようになる。また、遊びや生活の中で様々なことに挑戦し、失敗も繰り返す中で、難しいことでも自分の力でやってみようとして、考えたり、工夫したりしながら、諦めずにやり遂げる体験を通して達成感を味わう。そこで得た自信を基に、もっと難しい課題を自ら設定し、挑戦していく。そのような姿を先生や友達から認められることで、意欲が高まり、自信を確かなものにしていく。	<ul style="list-style-type: none"> ・主体的に園生活が送れるように、その日に必要なことを分かりやすいように視覚的に提示する。 ・幼児が自ら考えて行動できるように、ゆとりをもった園生活に配慮する。 ・やり遂げたことを共に喜ぶ。 ・幼児が失敗を繰り返したりしている時には、幼児なりに取組んでいる姿を認めたり、時には一緒に行動しながら励ましたりする。 ・幼児のよさが他の幼児に伝わるようにしたり、学級全体の中で認め合える機会を作ったりする。 	<ul style="list-style-type: none"> ・自分でできることは自分でしようと積極的に取り組む。 ・生活や学習での課題を自分のこととして受け止めて意欲的に取り組む。 ・自分なりに考えて意見を言ったり、分からないことや難しいことは、先生や友達に聞きながら粘り強く取り組む。

3. 「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」と先生の関わり、環境の構成や小学校へのつながり

幼児期の終わりまでに育ってほしい姿		幼児教育施設			小学校へのつながり
		～5歳児前半の姿	5歳児後半の姿	先生の関わり、環境の構成	
協同性	友達と関わる中で、互いの思いや考えなどを共有し、共通の目的の実現に向けて、考えたり、工夫したり、協力したりし、充実感をもってやり遂げるようになる。	友達と関わる中で、様々な出来事を通して、嬉しい、悔しい、悲しい、楽しいなどの多様な感情体験を味わい、友達との関わりを深めていく。その中で互いの思いや考えなどを共有し、次第に共通の目的をもつようになる。	イメージや目的を共有し、それを実現しようと、協力したり折り合いを付けたりすることを繰り返す中で、仲の良い友達だけではなく、いろいろな友達と一緒に、さらには、学級全体で協同して遊ぶことができるようになっていく。そして、考えたことを相手に分かるように伝え合いながら話し合い、一人では得られないものに集中していく気分を感じたり、力を合わせて問題を解決したりして、自分も他の幼児も生き生きするような関係性を築いていく。そうして、共通の目的の実現に向けて、考えたり、工夫したり、協力したりし、充実感をもってやり遂げるようになる。	<ul style="list-style-type: none"> ・幼児一人一人のひととの関わりの経験の違いを把握し、幼児によっては、自分に自信がもてなかったり、他者に対して不安になったり、人への関心が薄かったりすることもあることを踏まえて、適切な援助を行う。 ・集団の中のコミュニケーションを通じて、共通の目的が生まれてくる過程や、幼児が試行錯誤しながらも一緒に実現に向かおうとする過程、いざこざなどの葛藤体験を乗り越えていく過程を大切に受け止め、一人一人の幼児が十分に自己発揮しながら、他の幼児と多様な関りがもてるように援助する。 ・他の幼児を意識してもうまくいかない場面では、先生の姿勢や言葉かけから他の幼児のよさや協同して活動する大切さに、幼児自身が気付くようにする。 	・学級での集団生活の中で、目的に向かって自分の力を発揮しながら友達と協力し、様々な意見を交わす中で新しい考えを生み出しながら工夫して取り組んだりするなど、先生や友達と協力して生活したり学び合ったりする。

3. 「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」と先生の関わり、環境の構成や小学校へのつながり

幼児期の終わりまでに育ってほしい姿	幼児教育施設			小学校へのつながり
	～5歳児前半の姿	5歳児後半の姿	先生の関わり、環境の構成	
<p>道徳性・規範意識の芽生え</p> <p>友達と様々な体験を重ねる中で、してよいことや悪いことが分かり、自分の行動を振り返ったり、友達の気持ちに共感したりし、相手の立場に立って行動するようになる。また、きまりを守る必要性が分かり、自分の気持ちを調整し、友達と折り合いを付けながら、きまりをつくったり、守ったりするようになる。</p>	<p>他の幼児と様々な体験を重ねる中で、してよいことや悪いことがあることを分かり、考えながら行動するようになっていく。</p>	<p>いざこざなどの場面において、どうしたら楽しく遊べるか解決策を話し合ったり提案したりするような体験を重ねていく。そうした中で、自分の行動が正しいと思っても、話し合いの中で友達の納得できない思いを受け止めたり、友達に気持ちを受け止めてもらったことで、自分の行動を振り返って相手に謝ったり、気持ちを切り替えたりして、相手の立場に立って行動するようになる。</p> <p>また、人間関係が深まる中で、きまりを守る必要性が分かるようになっていく。特に、友達と遊ぶということは、自他に共有された何らかのルールに従うことであり、ルールを守ることで遊びが楽しめることを知り、自分の気持ちを調整し、友達と折り合いを付けていくようになる。さらに、より面白くなるようにルールをつくり替えたり、年下の幼児が加われば、仲間として一緒に楽しめるように特例を作ったりするようになる。</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・過去の幼児の経験を念頭に置き、相手の気持ちを分かろうとしたり、遊びや生活をよりよくしていこうとしたりする姿を丁寧に捉え、認め、励まし、その状況などを他の幼児にも伝えていく。 ・幼児が自分の言動を振り返り納得して折り合いを付けられるように、問い掛けたり共に考えたりし、幼児が自分たちで思いを伝え合おうとする姿を十分に認め、支えていく。 ・いざこざや言葉のやり取りが激しかったり、長い間続いたりしている場合には仲立ちをする。 ・幼児がなかなか気持ちを立て直すことができそうにない場合には、先生が幼児の心のよりどころとなり、適切な援助をする。 ・日々の遊びや生活の中できまりを守らなかったために起こった問題に気付かせ、きまりの必要性を幼児なりに理解できるようにする。 ・善悪を直接的に示したり、また、集団生活のきまりに従うように促したりするとともに、他者とのやり取りの中で幼児が自他の行動の意味を理解し、何がよくて何が悪かったのか考えることを促す。 	<p>・初めて出会う人の中で、幼児期の経験を土台にして、相手の気持ちを考えたり、自分の振る舞いを振り返ったりなどしながら、気持ちや行動を自律的に調整し、学校生活を楽しくしていこうとする。</p>

3. 「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」と先生の関わり、環境の構成や小学校へのつながり

幼児期の終わりまでに育ってほしい姿		幼児教育施設			小学校へのつながり
		～5歳児前半の姿	5歳児後半の姿	先生の関わり、環境の構成	
社会生活との関わり	<p>家族を大切にしようとする気持ちをもつとともに、地域の身近な人と触れ合う中で、人との様々な関わり方に気付き、相手の気持ちを考えて関わり、自分が役に立つ喜びを感じ、地域に親しみをもつようになる。また、園内外の様々な環境に関わる中で、遊びや生活に必要な情報を取り入れ、情報に基づき判断したり、情報を伝え合ったり、活用したりするなど、情報を役立てながら活動するようになるとともに、公共の施設を大切に利用するなどして、社会とのつながりなどを意識するようになる。</p>	<p>初めての集団生活の場である園生活を通して、先生との信頼関係を基盤としながら園内の幼児や教職員、他の幼児の保護者などいろいろな人と親しみをもって関わるようになる。その中で、家族を大切にしようとする気持ちをもつとともに、小学生や中学生、高齢者や働く人々など地域の身近な人と触れ合う体験を重ねていく。</p>	<p>幼児は、保護者、先生、友達、小学生や地域の人々とのこれまでの関わりを通して、家族の愛情に気付き、家族を大切にしようとするとともに、相手に応じた言葉や振る舞いなど、人との様々な関わり方に気付き、相手の気持ちを考えるようにしていく。さらに、手伝い等を通して、相手から感謝され、自分が有用な人間であることを自覚し、役に立つ喜びを感じるようになっていく。また、好奇心や探究心が一層高まり、関心のあることについて、より詳しく知りたいと思ったり、より本物らしくしたいと考えて遊びの中で工夫したりする中で、身近にあるものから必要な情報を取り入れるようになる。そうした体験を通して、幼児は、自分だけでは気付かなかったことを知ることによって遊びがより楽しくなることや、情報を伝え合うことのよさを実感していく。また、地域の公共の施設などを訪れることで、その場所や状況に応じた行動をとりながら大切に利用することなどを通して、社会とのつながりなどを意識するようになっていく。</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・機会を捉えて親や祖父母などの家族のことを話題にしたり、その気持ちを考えたりする機会を設け、幼児が、家族の愛情に気付くようにする。 ・地域の人々や障害のある幼児などとの交流の機会を積極的に取り入れ、地域の人たちとの関わる中、人間は一人だけで孤立して生きているのではなく、周囲の人たちと関わり合い、支え合って生きていることを、幼児が実感できるようにする。 ・絵本や図鑑や写真、新聞やインターネットで検索した情報、地域の掲示板から得られた情報などを、遊びに取り入れやすいように見やすく保育室に設定するなどの工夫をし、幼児の情報との出会いをつくっていく。 ・家族から聞いたり自分で見付けたりするなど幼児なりに調べたことを加えたり、遊びの経過やそこで発見したことなどを、幼児が関わりながら掲示する機会をもつ。 ・先生がモデルとなり、情報を集める方法や集めた情報の活用の仕方、そのことを周囲に伝える方法などがあることに気付かせる。 ・遊具や用具について、自分も友達も使いたいことで起こる衝突やいざこざなどの体験を通して、個人の物と皆の物とがあることに気付かせていく。 ・図書館や高齢者福祉施設などの様々な公共の施設の利用を通して、このような施設が皆のものであり、大切に利用しなければならぬことを指導する。 	<ul style="list-style-type: none"> ・相手の状況や気持ちを考えながらいろいろな人と関わることを楽しむ。 ・関心のあることについての情報に気付いて積極的に取り入れられたりする。 ・地域への親しみや地域の中での学びの場を広げていく。

3. 「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」と先生の関わり、環境の構成や小学校へのつながり

幼児期の終わりまでに育ってほしい姿		幼児教育施設			小学校へのつながり
		～5歳児前半の姿	5歳児後半の姿	先生の関わり、環境の構成	
思考力の芽生え	身近な事象に積極的に関わる中で、物の性質や仕組みなどを感じ取ったり、気付いたりし、考えたり、予想したり、工夫したりするなど、多様な関わりを楽しむようになる。また、友達の様々な考えに触れる中で、自分と異なる考えがあることに気付き、自ら判断したり、考え直したりするなど、新しい考えを生み出す喜びを味わいながら、自分の考えをよりよいものにするようになる。	身近な事象に積極的に関わる中で、物の性質や仕組みなどを感じ取ったり、気付いたりするようになる。	幼児は、物に興味をもって繰り返し関わる中で、次第にその性質や仕組みに気付き、幼児なりに物の仕組みなどを生かして、考えたり予想したり、工夫したりすることで遊びが発展していく。すると、物との関わりが深まり、新たに物の性質や仕組みに気付くといったように、遊びを通して物の理解を深めていく。 また、遊びの深まりや仲間の中には、幼児が物と多様な関わりをすることを促すが、幼児一人一人によって、興味や関心、発想の仕方考え方などが異なっている。幼児は、自分とは違った考え方をする友達が試行錯誤している姿を見たり、その考えを聞いたり、友達と一緒に試したり工夫したりする中で、友達の考えに刺激を受け、自分だけでは発想しなかったことに気付き、自ら判断したり、考え直したりするなど、新しい考えを生み出す喜びを味わい、自分の考えをよりよいものにしようという気持ちが育っていく。	<ul style="list-style-type: none"> ・環境の中にあるそれぞれの物の特性を生かしつつ、その環境から幼児の好奇心や探究心を引き出すことができるような状況をつくる ・それぞれの幼児の考えを受け止め、そのことを言葉にして幼児たちに伝えながら、更なる考えを引き出していく。 ・幼児が他の幼児との意見や考えの違いに気付き、物事をいろいろな面から考えられるようにすることやそのよさを感じられるようにする。 	<ul style="list-style-type: none"> ・新しい環境や教科等の学習に興味や関心をもって主体的に関わる。 ・探究心をもって考えたり試したりする経験は、主体的に問題を解決しようとする。

3. 「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」と先生の関わり、環境の構成や小学校へのつながり

幼児期の終わりまでに育ってほしい姿		幼児教育施設			小学校へのつながり
		～5歳児前半の姿	5歳児後半の姿	先生の関わり、環境の構成	
自然との関わり・生命尊重	<p>自然に触れて感動する体験を通して、自然の変化などを感じ取り、好奇心や探究心をもって考え言葉などで表現しながら、身近な事象への関心が高まるとともに、自然への愛情や畏敬の念をもつようになる。また、身近な動植物に心を動かされる中で、生命の不思議さや尊さに気づき、身近な動植物への接し方を考え、命あるものとしていたわり、大切にすることを覚えるようになる。</p>	<p>園内外の身近な自然の美しさや不思議さに触れて感動する体験を通して、自然の変化などを感じ取り、関心をもつようになる。また、身近な動植物に愛着をもって関わる中で、生まれてくる命を目の当たりにして感動したり、ときには死に接したりし、生命の不思議さや尊さに気づき、大切にすることを覚えるようになる。</p>	<p>主体的に自然のいろいろな面に触れることで、好奇心や探究心が生まれ、考えたことを幼児なりの言葉などで素直に表現し、先生や友達の共感により一層関わりたくなっていく。そして、遊びに取り入れたりする中で、新たな気づき生まれ、更に関心が高まり、自然への愛情や畏敬の念をもつようになっていく。小動物と遊んだり、餌を与えたり草花を育てたりする体験、生命の誕生や終わりに遭遇する体験などを通して、命あるものに対して、親しみや畏敬の念を感じ、自分と違う生命をもった存在として意味をもつようになる。そして、ただかわいがるだけではなく、身近な動植物への接し方を考え、命あるものとしていたわり、大切にすることを覚えるようになる。</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・園内外の自然の状況を把握して積極的に取り入れる。 ・幼児の体験していることや気付いたことを先生が言葉にして伝えることによって、幼児がそのことを自覚できるようにしたりしながら、それぞれが考えたことを言葉などで表現し、更に自然との関わりが深まるようにする。 ・飼育や栽培を通して単に世話をすることを教えるだけでなく、ときには関わり方の失敗や間違いを乗り越えながら、命あるものをいたわり大切にすることを育むように援助する。 ・それぞれの生き物に適した関わり方ができるように、幼児と一緒に調べたり、幼児たちの考えを実際にやってみたり、そこで分かったことや適切な関わり方を、学級の友達に伝えたりする機会をつくる。 	<ul style="list-style-type: none"> ・自然の事物や現象について関心をもち、その理解を確かなものにしていく基盤となる。 ・実感を伴って生命の大切さを知ることが、生命あるものを大切にし、生きることのすばらしさについて考えを深める。
数量や図形、標識や文字などへの関心・感覚	<p>遊びや生活の中で、数量や図形、標識や文字などに親しむ体験を重ねたり、標識や文字の役割に気付いたりし、自らの必要感に基づきこれらを活用し、興味や関心、感覚をもつようになる。</p>	<p>身近にある数字や文字に興味や関心をもったり、物を数えることを楽しんだりする場面が見られるなど、先生や友達と一緒に数量や図形、標識や文字などに触れ、親しむ体験を重ねていく。</p>	<p>自分たちの遊びや生活の中で必要感をもって、多い少ないを比べるために物を数えたり、長さや広さなどの量を比べたり、様々な形を組み合わせて遊んだりすることなどを通して、数量や図形への興味や関心を深め、感覚が磨かれていく。生活の中で様々な標識（交通標識など）に触れたり、絵本や手紙ごっこを楽しむ中で自然に文字に触れたりすることを通して、標識は人が人に向けたメッセージであることや、文字が様々なことを豊かに表現するためのコミュニケーションの道具であることに気づき遊びの中で使ってみたりすることで、興味や関心を深め、感覚が磨かれていく。</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・園生活で触れる形（積み木、花や昆虫など）に注目するように促したり、数えたり図ったりすること便利さに気付くようにする。 ・自分が話している言葉がある特定の文字や標記に対応していることを知るなど、幼児が新鮮な驚きと喜びを感じるような文字や標識との出会いができるよう、掲示物などの環境を工夫する。 ・園内にマークと文字を組み合わせた表示、形の特徴を生かして物を片付ける場所の工夫などをする。 ・幼児が関心をもったことに存分に組み込む中で数量や文字等との出会いを捉え、一人一人の関心のもちようを把握して、その活動の広がりや深まりに応じて数量や文字などに親しめるように環境を工夫する。 	<ul style="list-style-type: none"> ・小学校の学習に関心をもって取り組み、実感を伴って理解する。 ・学んだことを日常生活の中で活用しようとする。

3. 「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」と先生の関わり、環境の構成や小学校へのつながり

幼児期の終わりまでに育ってほしい姿		幼児教育施設			小学校へのつながり
		～5歳児前半の姿	5歳児後半の姿	先生の関わり、環境の構成	
言葉による伝え合い	先生や友達と心を通わせる中で、絵本や物語などに親しみながら、豊かな言葉や表現を身に付け、経験したことや考えたことなどを言葉で伝えたり、相手の話を注意して聞いたりし、言葉による伝え合いを楽しむようになる。	絵本や物語などに親しみながら、豊かな言葉や表現を身に付けていく。また、自分の気持ちや思いを伝え、先生や友達が話を聞いてくれる中で、言葉のやり取りの楽しさを感じ、そのやり取りを通して相手の話を聞いて理解したり、共感したりするようになっていく。	絵本や物語などの読み聞かせを通して、読んでもらった絵本や物語に特別な親しみを感じるとともに絵本や物語の世界を想像したり、自分の体験と照らし合わせたりして、豊かな言葉や表現を身に付けていく。そして、経験したことや考えたことなどを先生や友達に言葉などで伝え共感できる喜びを感じたり、自分の言ったことが相手に通じず、言葉で伝えることの難しさやもどかしさを体験したりするようになっていく。さらに、相手の話を注意して聞くようになっていく。例えば、相手の話に興味をもって聞いたり、ときには友達とのいざこざなどを通じて、そのときの相手の気持ちや行動を理解したいと思い、必要感をもって聞くこともある。このような体験を繰り返す中で、自分の話や思いが相手に伝わり、また、相手の話や思いが分かる喜びを感じ、言葉による伝え合いを楽しむようになる。	<ul style="list-style-type: none"> ・読み聞かせでは、落ち着いた雰囲気をつくり、幼児が絵本や物語の世界に浸り込めるようにする。 ・幼児の動線を踏まえて、幼児の目に触れやすい場に絵本が置かれ、落ち着いてじっくり見ることができる環境をつくる。 ・語り継がれている作品は、美しい言葉や韻を踏んだ言い回し、繰り返しの言葉で声を出して楽しめるものもあるので、お話の世界を通していろいろな言葉と出会えるようにする。 ・リズムカルな節回しの手遊びや童謡を歌うこと、しりとり、短い話をつなげて皆で一つの物語をつくるなど、言葉遊びを取り入れ、いろいろな言葉に親しめるようにする。 ・先生は、正しく分かりやすく、美しい言葉を使って幼児に語り掛け、言葉を交わす喜びや豊かな表現などを伝えるモデルとしての役割を果たす。 ・先生が、幼児の話やその背後にある思いを聞きとり、友達同士で自由に話せる環境を構成したり、幼児同士の心の交流が図られるように工夫したりする。 ・幼児の状況に応じて、言葉を付け加えるなどして、幼児同士の話が伝わり合うように援助をする。 	<ul style="list-style-type: none"> ・友達と互いの思いや考えを伝え、受け止めたり、認め合ったりしながら一緒に活動する。 ・自分の伝えたい目的や相手の状況などに応じて言葉を選んで伝えようとする。

3. 「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」と先生の関わり、環境の構成や小学校へのつながり

幼児期の終わりまでに育ってほしい姿		幼児教育施設			小学校へのつながり
		～5歳児前半の姿	5歳児後半の姿	先生の関わり、環境の構成	
豊かな感性と表現	心を動かす出来事などに触れ感性を働かせる中で、様々な素材の特徴や表現の仕方などに気付き、感じたことや考えたことを自分で表現したり、友達同士で表現する過程を楽しんだりし、表現する喜びを味わい、意欲をもつようになる。	生活の中で心を動かす出来事に触れ、みずみずしい感性を基に、思いを巡らせ、様々な表現を楽しむようになる。幼児の素朴な表現は、自分の気持ちがそのまま声や表情、身体の動きになって表れることがある。また、先生や他の幼児に受け止められることを通して、動きや音などで表現したり、演じて遊んだりしながら、自分なりに表現することの喜びを味わう。	幼児が身近な環境と関わる中で、何かを感じ、考えさせられ、その感動を友達や先生と共有し、感じたことを様々な表現することによって一層磨かれていく。このように、心を動かす出来事などに触れ感性を働かせる中で、様々なものを遊びの中に取り込み、何かに見立てたり、素材の組み合わせを楽しんだりして、自分なりの素材の使い方を見つけていく。そうして、一つの素材についていろいろな使い方をしたり、あるいは、一つの表現にこだわりながらいろいろな物を工夫して作ったりする中で、その特性を知り、表現の幅を広げていく。そして、感じたことや考えたことを自分で表現したり友達同士で表現する過程を楽しんだりし、表現する喜びを味わい、意欲をもつようになる。	<ul style="list-style-type: none"> ・ 幼児らしい表現を受け止め共感し、表現する意欲を高める。 ・ 先生のもつイメージを押し付けるのではなく、幼児と感動を共有できる感性を先生自身ももつ。 ・ 多様な素材や用具に触れながらイメージやアイデアが生まれるように、材質、携帯、使いやすさなどを考慮して環境を整えていく。 	・ 感性を働かせ、表現することを楽しむ。このことは、音楽や造形、身体等による表現の基礎となるだけでなく、自分の気持ちや考えを一番適切に表現する方法を選ぶなど、学校以降の学習全般の素地になる。